# 大阪大谷大学

## 令和五年度　入学試験問題（一般・前期）

# 国　語

**注意事項**

一　問題用紙は、全部で十ページです。解答用紙は一枚です。

二　解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。

三　解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。

四　問題用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章は、乾ルカ『水底のスピカ』の一節である。本文中の「和奈（かずな）」・「更紗（さらさ）」・「美令（みれい）」は、百人一首部に所属する高校三年生であり、修学旅行の際のある出来事をきっかけに仲良くなった。これを読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

「私は、これは発表すべきだと思います」

「そう。でも一応言っておくけれど」①藤宮のひじきみたいに小さな目が、悲しみを帯びたように和奈には見えた。「高校でだって、いじめは起こるかもしれないわよ。苦痛を伴う孤立は容易に起こる。高校生って案外大人じゃない。みんな、まだ幼いんだから」

「和奈ちゃん」

こちらを見る更紗に、和奈は自分を奮い立たせて頷（うなず）いた。

「更紗が発表したいなら、これはきちんと出さなきゃいけない。これを悪く言う誰かがもしいたら、私が戦う。部長として、更紗を守ります」

「……なるほど、分かりました」

藤宮は腕組みを解いた。

「それでは私も顧問として、あなたたちを守ります。じゃあ掲示ボードを運び入れましょうか」

隣の書道室へ行くと、部活動のない木曜日だというのに、全員が設営のために集まっていた。

「美令、今日海は？」

「今日はこっちが大事。最後だから」

最後と言った美令の声は、和奈のa コマクをいつまでも揺さぶった。最後。これが最後だ。

掲示ボードを動線を作るように配置し、教室中央には一般的な百人一首と下の句かるたの実物を展示する。窓際前方にはい草のカーペットを敷き、実践コーナーも作った。

部員全員で取り組んだ共同発表を順に貼り、各人の研究発表は教室後方にそれぞれが掲示して、作業は終わった。

一年生五人、三年生三人の選んだ一首たちが、等しく明らかになる。

「鈴木と田中は紫式部と清少納言なんだな」
②「うちら、相談して合わせたんだよね」
わいわいと発表を眺める一年生も、更紗の掲示の前では言葉をなくしていく。
藤宮がそっと教室を出ていき、部員全員分のジュースを抱えて戻ってきた。
学校祭初日の朝。
開場の九時半を前に、和奈は書道室後方の部員らの発表を改めて見つめた。
美令は後鳥羽院の『人もをし 人もうらめし あぢきなく 世を思ふゆゑに 物思ふ身は』を取り上げていた。なぜこの歌を選んだのか、和奈はしばし考えさせられた。後鳥羽院と同じように、美令も誰かを愛しくも恨めしくも思ってしまうのか。美令もこの世のことをつまらなくやるせないと鬱々としているのか。そうだとしたらどうしてか。美令に愛しいという感情、恨めしいという感情を向けられる相手がいるなら、それはいったいどんな人なのかと。
和奈本人は『天つ風 雲の通ひ路 吹きとぢよ をとめの姿 しばしとどめむ』を選んだ。理由は得意札であり、人気札でもあるからだ。下の句かるたをやる子どもたちは、ほとんどみんなこの札に［ I ］をあげる。もう一つ、選んだ理由がある。それは和奈自身が乙女座だからだ。この歌の札は『乙女』の字がとても読みやすい。子どもには難易度の高いb クズし字の札の中で、『乙女』と明朝体のように書かれてあるのは、きっぱりとしていてとりわけ目を引く。和奈は存在感のある乙女の札に憧れ、乙女座を言い訳に自分を重ね合わせてきた。
一年生らも頑張った。穂村、渡辺、鈴木、田中、秋元。真面目にきちんとしたものを貼り出せた。鈴木と田中は紫式部と清少納言の歌を選び、セットで読めば互いに相手のことを漫才のように毒づいているのが分かるという面白い仕掛けになっていた。
しかし何より更紗である。
彼女の発表を前に、和奈は知らずしらず［ II ］を正していた。
彼女は末の松山の歌を選んでいた。
『末の松山とは、宮城県多賀城市に実在するクロマツです。どんな大津波が来ても、この松を越えることはないと言われています。そこから、越えようとしても越えられない大きな存在という意味が生まれました。

二〇一一年の東日本大震災の際も、波は松を越えなかったそうです。

あの日、私の父は仕事で多賀城市にいました。海に近い国道四十五号を車で走行していました――』

末の松山という実在の松にフォーカスしつつ、更紗と更紗の家族を襲った出来事を淡々と語り添えながらの解説だった。彼女の文章には恨みも嘆きもなかった。思いの丈[c]的なものを表明しようとしているのではないのだった。[X]、果てなく広がる海のような彼女の悲しみが見えた。今まで何となく感じ取るだけで、明らかにされてこなかった更紗の過去、トラウマ、弱み、涙、それらがはっきりと影を持って立体化した瞬間だった。

被災以来、海に近づけないでいるとも書かれていた。

長く[Ⅲ]をつぐんでいたことを、なぜ表に出す気になったのか。それについては、分からないことだった。藤宮のケネン[d]どおり、この発表を悪く言う人もいるに違いなかった。お涙頂戴(ちょうだい)だ、同情を欲している、不幸のマウントだと。更紗にそのつもりがなくても、そう思われてしまう。更紗もきっとそれを察しているから、今まで言わなかったのだろう。なのに、こうやって表明した。

たった一つだけ言えるのは、更紗は変わった、あるいは、変わろうとしているということだ。だからこそ、これを書いた。

更紗の発表は、こんな一節で締め括(くく)られていた。

『いつかまた、海と仲良くなれたらと願っています。このことが、私にとっての末の松山なのだろうと、この歌に触れるたびに思います』

和奈は百人一首部を創部して良かったと、心の底から思ったのだった。学校祭を区切りにして良かった、研究発表を提案して良かった。自分がこのような発表を手掛けられなかったのは残念だが、それでも本当によかった。

いつの間にか美令が隣にいて、一緒に更紗の発表を眺めていた。美令が打ち明けた。

「私、昨日これを読んだとき、動けなくなったんだ」

「知ってる。美令、石になったみたいだった」

昨日、初めて更紗の発表を目にした美令は、貼り出された掲示の前でしばらく微動だにしなかったのだが、やがて振り向いて、和奈の隣にいた更紗に笑った。清々しい笑顔だった。おかしなことだが和奈は美令の笑顔に、敗れ去った人間の色合いを見た。[Ⅳ]を削ってきたライバルに完敗した瞬間のそれ。更紗は誰かを負かすつもりなど毛頭[e]なかったはずだ。[Y]美令は敗北したという

より先を越されたという気分だったのかもしれない。その気持ちは和奈も分かる。変わりたい、今のつまらない自分を変えたい望みは、和奈の中に捨てきれずあるのだから。同情も慰めも理解も共感も、言葉では表明しなかったかわりに、美令が笑顔で示したのは、ほんの僅かの悔しさ、それから相手へのリスペクト、賞賛だった。変わりたいと望んで一歩踏み出せた相手への敬意を、和奈は見てとった。

（注）本文中の和歌とその現代語訳は次の通りである。

人もをし　人もうらめし　あぢきなく　世を思ふゆゑに　物思ふ身は

（現代語訳）人をいとしく思い、また人を恨めしくも思う。この世をつまらないと思うために、物思いをする我が身は。

天つ風　雲の通ひ路　吹きとぢよ　をとめの姿　しばしとどめむ

（現代語訳）空の風よ、雲の中の天への通路を吹き閉ざしておくれ。天女のような舞姫の姿を、少しの間とどめたいので。

ちぎりきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　波越さじとは

（現代語訳）約束しましたね。互いに涙で濡れた袖を絞りながら、末の松山を波が越すことのないように、心変わりをすまいと。

問一　二重傍線部a・b・dのカタカナを漢字に直し、c・eの漢字の読みをひらがなで答えよ。

問二　空欄 I ～ IV に入る最も適当な語句を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I　ア　情熱　イ　血道　ウ　全力　エ　心血

II　ア　まちがい　イ　眼目　ウ　居住まい　エ　袖

III　ア　目　イ　手　ウ　耳　エ　口

IV　ア　しのぎ　イ　骨身　ウ　命　エ　のみ

問三　空欄 X ・ Y に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（ただし、同じ記号は二度使えない）。

ア　だから　　イ　そして　　ウ　にもかかわらず　　エ　また　　オ　ところで

問四　傍線部①「藤宮のひじきみたいに小さな目が、悲しみを帯びたように和奈には見えた」とあるが、和奈は藤宮の目からどのような感情を読み取ったか、その感情として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　和奈や更紗に自分の心配がしっかりと伝わらない徒労感
イ　更紗が非難やいじめの対象になることを危惧した無力感
ウ　部員たちと自分との考えの隔たりを痛切に感じた疎外感
エ　更紗の悲しみを理解しても癒やすことができない絶望感

問五　傍線部②「うちら、相談して合わせたんだよね」とあるが、その内容を説明する最も適当な一文を本文から抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

問六　次の文章は、和奈・更紗・美令それぞれが選んだ和歌について説明したものである。文章を読んで、後の問に答えよ。

美令は、後鳥羽院の歌を選んだ。このことから、美令が誰かを愛しくも恨めしくも思っているのかと、和奈は推測している。和奈は、「天つ風」の歌を選んだ。和奈はこの札の［A］ところに憧れ、自身もそのような存在になりたいと願っている。更紗は、末の松山の歌を選んだ。「末の松山」は宮城県多賀城市にある。更紗は「末の松山」に結びつく③自身の身の上の重大事を告白し、「［B］」と未来への希望を述べた。自身の過去の［C］と向き合い、勇気を持って一歩踏み出した更紗を、和奈は心の底からうれしく思った。美令も、更紗の発表に［D］で答えた。和奈は、美令のその様子に更紗への敬意を読み取った。

(1)　空欄［A］～［D］に入る最も適当な語句を本文から抜き出して答えよ。なお、［A］は六字、［B］は二十三字、［C］は四字、［D］は六字で答えよ。

(2)　傍線部③「自身の身の上の重大事」とはどのような出来事か、本文中の語句を用いて三十字以上四十字以内で答えよ。

(3)　和奈・更紗・美令の三人に共通する未来への思いを、本文から十六字で抜き出して答えよ。

二　次の文章は、江戸時代に書かれた『百人一首一夕話』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

遍昭、在俗の時良峰宗貞といひて、仁明天皇に仕へ奉り、a蔵人頭にて常に玉座に近く馴れ奉られ、美男にして歌の上手なりし。宗貞或年の正月十日志す所ありて出で行かれ①ける道に、五条わたりにて雨の降り出でければ、しばし雨宿りせん②とて、荒れたる家の軒にたたずみながら奥の方を見入れらるるに、五間ばかりなる檜皮葺の家にて人影も見えね③ば、宗貞何となく門内に歩み入りて見れば、端の間の軒に梅のいと面白く咲きたるに鶯も鳴き居たり。人ありげにも見えぬ簾のうちより色濃き衣の上に薄色の衣を着て、たけだちよき程なる女の髪いと長く見ゆるが、A

よもぎ生ひて荒れたる宿を鶯の　人来と鳴くや誰とか待たん　B

と独り言に吟じたれば、宗貞これを聞くよりそぞろに心浮れて、

b来れどもいひし馴れねば鶯の　君に告げよと教へてぞ鳴く

と声麗しう吟じ返せば、かの女うち驚ける気色にて、恥づかしき様を見えたる事よと思ひ顔にて、物もいはず内に入りたり。宗貞やがて縁に上がりていふやう、「何とて物はのたまはぬ。雨のわりなく降り侍れば、この雨の止むまではこの簀子にかくて侍らん」と言へば、内よりかの女の声にて、「かやうに荒れたるすみかにて候へば、雨宿りし給ふとも大路にまさりてわびしう思し召さん④事の恥づかしうこそ候へ。まだ初春の空にて寒さの堪えがたう侍らんものを」とて、C簾の内よりしとね差し出だしたれば、宗貞いと嬉しくて、かのしとねを引き寄せて坐しぬ。

さてつくづくとあたりを見れば、簾のへりも蝙蝠などのつつきたるにや、所々損はれたるに、内のしつらひのほの見ゆるに、昔ゆかしう畳などよかりけれど古びたり。かくて日もやうやう暮れぬれば、宗貞いつともなしに簾の内にすべり入りたれば、かの女は奥へ入らんとするを引き留めて、何かと語らふに、女今さらに恥づかしく悔しと思へどせん方なき様なるに、雨はなほ小止みもなくc夜夜降り明かして、またの日の朝になりて少し空晴れたるに、女はなほ奥の方へ退かんとするを許さず。とかくするうちに日も高くなりたり。D この女の母の親、宗貞にあるじまうけすべき方もなかりけるにや、供なる小舎人童には塩さかなにて酒飲ま⑤せ、宗貞には広庭

に生ひたる若菜を摘みて蒸し物E といふものにして茶椀に盛り、箸にはかの庭に咲きたる梅の花の盛りなる枝を折りて、その花に母の手にて歌を書き添へて出だしたり。

君がため衣の裾を濡らしつつ　春の野に出でて摘める若菜ぞ

宗貞F これを見るに、いとあはれに覚えて引きよせて食ふを、女恥づかしう思ひて伏したるままにて顔を背けたり。宗貞やをら立ち出でて、供なる小舎人童を宿に走らせて、車にて様々の物を取りよせてこの家に残し置き、「今また参り来ん」とて別れて帰りけるが、それより後は絶えずこの女の方を来とぶらひけり。隔てなき友に密かにこの事を語るとて、「よろづの物を食へど、なほ五条にて食ひたりし若菜のあつものの珍しかりしには似ず」とぞいひける。

（注）

簀子……寝殿造りで、廂の外側にある板敷きの縁側。雨露がはけるように少し間を透かしてある。

しとね……座るときや寝るときに使用する敷物。

あるじまうけ……主人として客をもてなすこと。ごちそうすること。

問一　二重傍線部a～cの漢字の読みを、ひらがな、現代仮名づかいで答えよ。

問二　傍線部①～⑤の助動詞の意味として最も適当なものを、次のア～クの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（ただし、同じ記号は二度使えない）。

ア　可能　　イ　尊敬　　ウ　意志　　エ　打消　　オ　推量　　カ　完了　　キ　婉曲　　ク　使役

問三　傍線部Ａ「の」と文法的に同じ働きをしている「の」を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　五条わたりにて雨の降り出でければ
イ　荒れたる家の軒（のき）にたたずみながら
ウ　内のしつらひのほの見ゆるに
エ　またの日の朝になりて少し空晴れたるに
オ　かの家に咲きたる梅の花の盛りなる枝を折りて

問四　傍線部Ｂ「人来と鳴くや誰とか待たん」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　誰かが来るとでも言うように鳴くなあ。誰が来ると思って私は待とうか。
イ　誰かが来るとでも言うように鳴くなあ。私は誰と一緒にその人を待つのか。
ウ　人が来たら鳴くのだろうか。私は誰のことも待っていないというのに。
エ　人が来たから鳴くのだろうか。一体、私は誰と待ったらいいのだろうか。
オ　人が来ることを教えるように鳴くなあ。誰がそれを待っているのだろうか。

問五　傍線部C「簾の内よりしとね差し出だしたれば」とあるが、女はなぜ「しとね」を宗貞に差し出したのか、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　誰もいないと思って吟じた和歌を、宗貞に聞かれただけでなく、雨宿りをしたいと言われたため、好意を持ったから。
イ　鶯の鳴き声を聞いて詠んだ和歌に、宗貞がすばらしい返歌をしたので、その機知に感心したから。
ウ　簀子にいると濡れてしまうので、家の中に入って温まって欲しいと伝えたかったから。
エ　家は荒れていても、しとねぐらいはあるので、雨で冷えないようにするのが、軒先を貸した主人のつとめだから。
オ　家が荒れていて、雨宿りしてもかえってひどく濡れるかもしれず、初春の寒さを我慢できないのにと思ったから。

問六　傍線部D「この女の母の親」が、小舎人童には塩と酒を出し、宗貞には庭で摘んだ若菜を蒸し物にして出した理由を、作者はどのように考えているか、作者の推測を述べた部分として最も適当な箇所を、本文から二十字以上二十五字以内で抜き出して答えよ。

問七　傍線部E「蒸し物」を指す別の語句を、本文中から五文字以内で抜き出して答えよ。

問八　傍線部F「これを見るに、いとあはれに覚えて引きよせて食ふ」を、「これ」の指示内容を明らかにし、主語などを補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問九　「六歌仙」に含まれないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　在原業平　　イ　僧正遍昭　　ウ　小野小町　　エ　文屋康秀　　オ　大伴家持